

公益財団法人 セコム科学技術振興財団
研究成果報告書

研究課題名
古代ローマ帝国の防災・防犯マネジメント

Disaster and Crime Management in Ancient Roman World

研究期間
平成27年 4月 ～ 令和 元年 3月

報告年月
令和 2年 3月

研究代表者
九州大学 大学院 人間環境学研究院 教授
堀 賀貴

Faculty of Human-Environment Studies
Kyushu University
Dr. Yoshiki HORI, Professor

概 要

パックス・ロマーナは「平和な時代」ではなく、古代ローマ人が「危機管理に成功した時代」と考えるべきである。洪水、交通渋滞、防犯など、現代にも通ずるリスクに直面した古代ローマ人が、どのように対処したのか、そして文明の象徴でもあった都市・建築をどのように守ったのかについて、古代ローマを代表する三つの遺跡、ポンペイ、ヘルクラネウム、オスティアをフィールドとして明らかにした。遺跡の実測にレーザースキャニングや写真測量の技術を応用することによって、古代ローマ建築・都市、とくにポンペイとオスティアについての研究が大きく進展しただけでなく、新しい情報が取得されたことにより、災害や犯罪に関する危機管理に関するヒントも新たに得ることができた。本概要では日本建築学会計画系論文集に発表した以下の2点の論文について概観する。

ポンペイ

1) ポンペイにおける街路の大半は幅員 2.5m 以下であり、荷車交通に適しているとはいえ、むしろ二輪の荷車、駄獣、あるいは人力による都市内物流に主にたよっていたと考えられる。轍の痕跡を観察する限り、それらは街路の中央を通行しており、対向車に出くわした場合にはのみ回避行動をとっていたとみられる。2.5m より狭幅の街路や市門（ただし、エルコラーノ門は除く）では、交互片側通行が一般的であった。さらに街路上には、障害物としてのステッピングストーンや公共噴水があり、とくにスタビア通りでは、物理的に荷車の交通を阻害していた。また、荷揚げや荷下ろしにともなう路上駐車や動物の係留も物流の阻害要因として働いており、道幅が広くても整然とした車線通行が想定できる環境にはない。こうした状況を考慮すると、これまでの研究者は、従来の幹線街路としてのスタビア通りの輸送能力を過信しており、むしろステッピングストーンのないコンソラーレ通りの輸送能力を再検討すべきである。ポンペイ当局は、こうした不便さ、非効率な、あるいは複雑にもつれた交通体系を逆にうまく利用して荷車交通をコントロールしていた。

オスティア

2) 都市のあらゆるインフラ整備計画において、街路の維持管理は最重要な課題といえる。オスティアで実施された街路のかさ上げについて、継続的に維持管理を続けるよりも、工事区間をしっかりと決めて行うことが明らかに重要であった。いいかえれば、工事中の街路に面することで、アクセスが制限される建造物や街区への影響は免れないため、ゆっくりと長い工事期間を設定するよりも、短い工事期間を設定するほうがより影響を限定できる。オスティア全域におよぶ精密なレーザー実測により、帝政初期に建設された東西および南の市門がテヴェレ川に沿った大地の周縁に位置していたことが判明した。とくにデクマヌス・マキムスは一定の勾配をもった坂道ではなく、段階的に整備された平坦な部分を坂道でつなぐ構造をもっていた。これらの平坦部は、都市設計の過程で綿密に計画され、古代ローマに典型的とされる美的要素や軸線性ではなく、より実際的な機能に応じて設計されていた。